

「老後は子どもと同居するのがよい」は少数派です

内閣府が6,252人を対象に行った「一般的に、老後は誰とどこで暮らすのがよいと思うか」という世論調査結果を、親の介護にかかわり自身の老後も考えている60歳代と、その子ども年齢の30歳代でくらべて見ました。「息子や娘と同居するのがよい」は60歳代でも28%と少なく、30歳代ではわずか15%に減ります。これに対し「子どもたちとは別に暮らすのがよい」は37%と34%でともに3人に一人を占めています。老親と子どもは「近くに住むのがよい」は30歳代で42%と半数近くなり、子どもは自立して「スープの冷めぬ距離」のような住み方を良しとする意識が若年層中心に根付いています。

同居する子どもについて、60歳代では「息子と同居するのがよい」が28%のうち15%と半数を超え、跡継ぎ的な考え方の強さを感じますが、「娘」も8%いて「息子」へのこだわりが弱くなりました。「子どもの近くに住むのがよい」では「息子の近く」は30歳代で5分の1、60歳代では3分の1と「息子」へのこだわりが一層弱くなっています。

